

## 13-19-T001-08

脊髄損傷者の損傷レベルの違いが体肢の血管拡張能力へ及ぼす影響

○福嶋利浩（筑波大学）、三木由美子、津村明伸、矢部京之助（大阪体育大学大学院）  
山崎昌廣（広島大学大学院）、中田英雄（筑波大学大学院）

本研究は、定期的にスポーツを実施している脊髄損傷者の上下肢の血管拡張能力に及ぼす損傷レベルの影響を明らかにすることを目的とした。被験者は脊髄損傷者 12 名であり、高位損傷群 7 名（T6 以上）及び低位損傷群 5 名（T7 以下）に分けた。また、運動習慣のない健常成人 8 名を対照群とした。被験者はすべて男性であった。血管径の変化測定は、静脈閉塞体肢容積描画法を用いて、前腕部と下腿部において行った。血管拡張能力は、5 分間の動脈阻血後の反応性充血時の最高血流量と安静時の値に戻るまでの時間から評価した。前腕部の血管拡張能力に損傷レベルによる差異はみられなかったが、下腿部においては、高位損傷群の最大血流量は低く、また安静時の値に戻る時間も延長する傾向がみられた。このことより、血管拡張能力には神経系が一部関与していることが示唆された。

## 13-19-T001-09

pedarX 足圧分布測定器を用いた高齢下肢障害者の歩行特性の解析

○浜崎 博（京都薬科大）、下村雅昭（京都女子大）

定期的に運動療法に参加し、下肢に障害を有する者について、pedar X（NOVEL 社製）を用いた歩行の解析を行った。対象は運動療法に参加する女性 3 名（R 群）、コントロール群として看護師、女性 3 名（C 群）。PedarX を装着し、通常速度で 5～7m の平坦なコースを歩き、その結果をリアルタイムで PC に収集、専用ソフトによって解析、両群を比較した。サンプルは歩行終了前の左右各 3 歩を用いた。重心の片足・両足加重時間（比）と偏差、踵と土踏まずにおける圧力差、重心軌跡等について検討した。1 歩における両足加重時間（比）では R 群が高く（.018sec、17.2%）、逆に片足加重時間比では C 群が高かった（85.3%）。また 1 歩毎の偏差も R 群が片足、両足ともばらつきが大きかった。踵の圧力は体重比では R 群が小さかった。今回の対象者が各群 3 名と少例のためどの検討項目においても両群に有意差は認められなかった。

## 13-19-T001-10

小・中学校に通う肢体不自由児の体育授業における現状と教育的ニーズ

○松浦孝明（筑波大学附属桐が丘養護学校）

障害児の教育が特別支援教育として転換が図られる中で本校の教育相談・教育支援事例に体育授業に関するものも集積しつつある。しかし、障害への配慮が十分に行われている事例は少ない。本研究では、小・中学校に通う肢体不自由児とその保護者を対象に実施したアンケート調査から、体育授業の現状と課題、併せて体育授業に対する教育的ニーズについて整理した。その結果、障害の部位や程度に関わらず授業参加が十分に保障されず、授業に介助者を求められる、別課題、見学、教室での自習などの制約があることが明らかにされた。また、教育的ニーズとして他の児童生徒と一緒に授業参加することと障害特性に応じた配慮を希望していた。また、障害者スポーツの専門的知識を有する教師や指導者の配置を期待しており、肢体不自由児とその保護者が小・中学校の体育授業に Adapted Physical Activity の視点を取り入れた展開を求めていることが示唆された。

## 13-19-T001-11

視覚障害学生の BMI とその経年変化について

○天野和彦（筑波技術大学）、香田泰子（筑波技術大学）

本学は、視覚または聴覚に障害のある学生が学ぶ、わが国で唯一の高等教育機関である。ここでは学生のほとんどが自宅外通学である。充実した学生生活のためには、健康の維持増進が基盤であり、健康の維持増進については、食生活と運動が大きく関与している。健康と運動や食生活との関わりについては、「健康日本 21」において「身体活動・運動には、生活習慣病の発生を予防する効果があり、健康づくりの重要な要素である」こと、「栄養・食生活は、多くの生活習慣病との関連が深く、また、生活の質との関連も深い」ことが示されている。今回、視覚障害学生を対象とし、日常の身体活動および栄養・食生活と生活習慣病のリスクファクターである肥満との関連を検討する基礎資料を得るために、在学中の BMI とその経年変化について調査を行い、若干の知見を得たので報告する。